2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2023年1月19日発行　SSKW増刊通巻　5862号

SSKW

巣立ちだより

No.58

新春を迎えて

田尾有樹子
巣立ち会理事長

２０２３年が明ける。初めてコロナのことがニュースになったのは２０２０年１月であった。このウイルスに世界が悩まされ始めて足掛け４年になろうとしている。世界で今まで６億６千万人以上の人が感染し、６６０万人以上が亡くなった。日本でも６万人の人が亡くなったといわれる。コロナが始まった時、「戦争だ。」と思ったが、その直感に間違いのない結果となっている。しかし、あの時、本当の戦争が、それも第三次世界大戦を引き起こしかねないような戦争が本当に起こると誰が予測できたであろうか。

昨年は私の人生の中で、個人的なエピソードがあった年を除いて、最悪な年だったと思う。何か、人類が積み上げてきた英知が足元から崩れ落ちるような、世界が破滅してしまうような世界没落感を感じた。この世界没落感は統合失調症の症状と言われる。ありえないようなことを感じるという意味で、妄想に分類されるのだが、これは妄想ではなく、現実に起こっていることなのである。ウクライナ戦争はまだまだ先が見えない。世界戦争になる危険性を今もはらんでいる。

こんな中で私たちは日々薄氷を踏む思いで、毎日を過ごしている。こんな中だからこそ、日常の何気ない日々を大切にしていくしか、私たちにできることはないと思うのである。

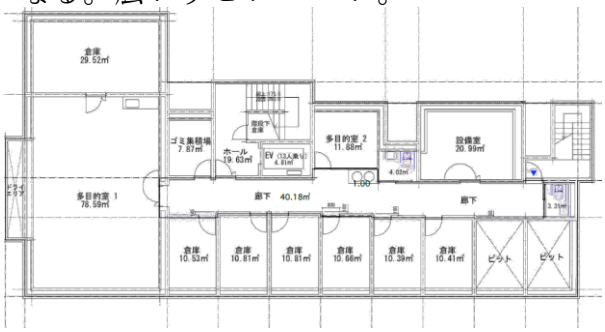
一昨年から準備している夢幻（グループホーム）が着工に向けて国庫補助の協議の場へと今年は進む。もし今年、国庫補助が付けば、今年の末に着工、来年末に竣工となる。巣立ち会は長い入院生活を経験した人たちの地域での居場所を作ることから始まった。グループホームが

「夢幻」完成予想図

新春を迎えて

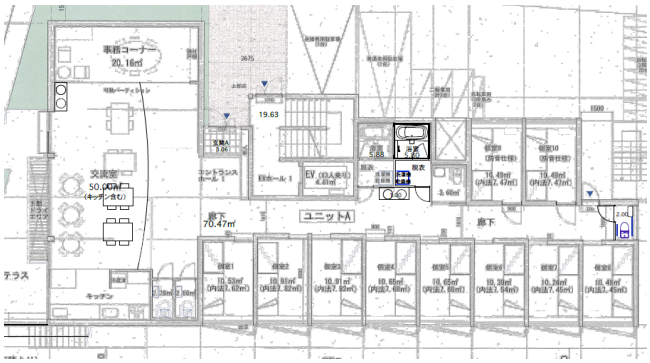
最初の事業だった。住む場所が無ければ病院から退院ができない。とにかく住む場所が必要だった。しかし、30年前、私も若く、住む場所ではプライバシーの確保を重点項目と考えた。既存の建物を借りるため、アパートタイプしか選択肢がなかったこともあるが、巣立ち会のグループホームは全てアパートタイプである。

しかし、この節、利用者の高齢化もあって、少しずつ、日常生活に支援者の介助が必要な人が増えてきている。介助ができないという理由で、精神科的には時に問題がないのに、病院に戻さざるを得ない人が出てきているのである。 地域での生活を大切に考えてきた私たちとしては如何せん口惜しい。支援がしにくいことが主にハードの理由であるなら、ハードを準備して支援の幅を広げたいと考えた。今回建てる建物は２０名の人が入居できる共同住居になる。広いリビングがあり、お風呂やお手洗いも共同となる。しかし、居室以外での行動にはスタッフの目が届くことになる。一人暮らしが心配になった人たちにとってはいつでも人の手が借りられる空間となろう。スタッフも２４時間体制で就くことになる。人に応じて、段階に応じた支援を提供できるように考えていく、それが今回の夢幻のコンセプトである。巣立ち会としては新たな段階へのチャレンジである。今回この建物には地下を作る。ウクライナの建物に地下があんなに多いということに驚きを感じずにはいられなかった。彼らはいつ防空壕が必要になるのかわからないという思いの中で、地下室を作ってきていたのである。平和な国、日本で防空壕を準備しようと考えるのは性急かもしれない。しかしいま世界は何が起こるかわからなくなっている。防空壕などで利用する日がないことを祈ってやまない。

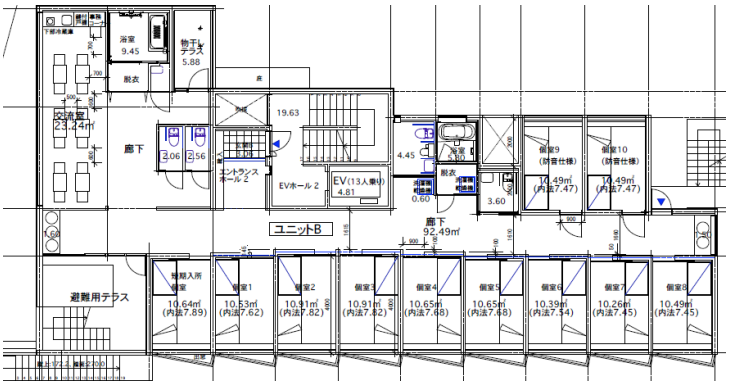


地階

1階



2階



ふれあいトーク・リカバリーカレッジ他体験記

昨年の１２月、ふれあいトークが開催されました。ふれあいトークとは三鷹市でピアサポート事業を開始以来の年一度のイベントで、今年で１７回目を迎えます。現在は同じく三鷹市ピアサポート事業提供の市民講座「リカバリーカレッジ」での学びを発信する場として、受講生を実行委員として開催されています。他人事ではない、メンタルヘルスに関わる人生の様々な課題を市民と一緒に考えていくこと目指し、メンタルヘルスに興味のある方ならどなたでもご参加いただいています。今年は104名（会場：55名、オンライン：49名）が参加されました。

前半は元受講生によるリカバリーカレッジ体験記の発表がありました。タイトルは「私は本当に変わったの？～ちゃきもんとリカバリーとの出会い～」です。発表者はカレッジ受講中にサポーターとなり、現在は都内グループホームでピアスタッフとして勤務中です。一緒にサポーターを務めた受講生、現同僚やご主人とともに、その「変わりぶり」についてコメントを交わされました。会場からの質問にも落ち着いて応える発表者はただただ魅力的で、「私もまだまだ変われるかも？！」との希望を与えていただきました。

体験記発表者の方々

後半は、「何があったら生きる希望がもてるかね、知らんけど。」をテーマに受講生がシンポジウムを行いました。「長引くコロナ禍でなかなか希望を持ち辛いなか、会場と一緒に生きる希望について考えていければ。」実行委員一同そんな想いを胸に、ただ聞くだけのシンポジウムに終始しないよう取り組みました。

会場からは、各実行委員が肩に力が入りすぎていない感じで、リラックスして参加できた、という感想をいただきました。今後も市民一人一人が自分事としてメンタルヘルスの課題に取り組める場づくりに皆で取り組んでいければ、と思います。実行委員の皆様、当日ご参加の皆様、本当にお疲れ様でした。

（大平）

会場参加者とのやりとり

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2023年1月19日発行　SSKW増刊通巻　5862号

講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」

巣立ち会では今年度、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成を受け、「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業」を実施しています。

この事業は、支援の必要な若者がサービスを利用するには医師の診断が必要であることや、教育・福祉など制度が縦割りになっていて使いづらいといった課題の解消を目指すものです。

この事業の一環として、11月5日に、巣立ち会顧問医で吉祥寺病院に勤務されている澤井大和先生を講師としてお招きし、「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」と題した講演会を行いました。澤井先生は、年齢・性別や障害の有無にかかわらず平等な医療が提供される体制づくりにご関心をお持ちとのことです。生物学的研究が盛んな近頃にあって、社会的な視点を重視する若手ドクターの存在は、地域で支援を行う私たちにとって心強く感じます。

澤井大和氏

今回の講演の内容も、そうした視点が生かされたものでした。ひきこもり状態のきっかけとして「思春期・青年期におこりやすい葛藤を抱えている場合」「発達の特性がある場合」「なんらかの精神疾患の関わりがある場合」の3つについて、事例を提示しながらわかりやすく解説をしてくださいました。なかでも「思春期・青年期の葛藤」には、他人を頼ることを否定する「自立」観や、具体的な状況でどう行動するかという学習機会が乏しくなっていることなど、社会のあり方が影響しているとのことでした。また、支援の面では、旧来の学校教育のような「集団的」な場ではなく、個々ばらばらな存在がたまたま空間と時間を共有している「集合的」な場が重要だという点も印象的でした。

講演の中で紹介されていた江戸川区の調査でも指摘されていましたが、社会の側に十分な準備がないために、当事者や家族が相談しづらいという現状があるようです。この事業を進めながら、数多くのニーズの伏在を感じる一方、必要な支援がほんの一部の人にしか届いていないように感じます。社会全体の課題である以上に、私たち支援機関の大きな課題として、必要な人が支援を受けやすい体制を作っていくことの必要性をあらためて感じました。

（植田）

上映会「プリズン・サークル」

去る１０月８日（土）、サザンにて映画『プリズン・サークル』の上映会をおこなった。本上映会は、ウィメンズアクションネットワークと共催という形で実現した。

『プリズン・サークル』は、島根県浜田市にある「島根あさひ社会復帰促進センター」を舞台にしたドキュメンタリー映画である。島根あさひ社会復帰促進センターは、犯罪傾向の進んでいない男性受刑者等、2,000名を収容する刑務所である。当センターでは、心理や福祉の専門性を有する民間の支援員が中心となり、「ＴＣユニット」と名付けられた更生プログラムを実施している。ＴＣユニットとのＴＣとは、Therapeutic Community（セラピューティック・コミュニティ）の略で、回復共同体を意味する。メンバーが相互に影響を与えあい、新たな価値観や生き方を身につけることで成長を促していく。

ＴＣユニットでは、メンバーに積極的に対話することを促している。受刑者たちが輪になって自身が犯した罪や幼少期の体験について語り合い、時に自身の過去に涙を流す様子が印象的であった。日常生活のなかで、自分の幼少期を含めた過去の体験話をする機会は滅多にない。特に自分にとってつらいと感じるような体験については、向き合ったり語ったりすることも避けるだろう。幼少期のつらい体験が犯罪に直結するわけではないが、映画に登場する方々は、なぜ今自分がここにいるのかについて、過去の自分（幼少期の体験や罪を犯した自分）を自身の言葉で語り、向き合っていた。過去を変えることはできないが、これからの未来の自分を変えることはできると希望をもつことができた映画であった。

会場の様子

また、今回は共催という形式であったため、本映画の監督である坂上香さんや上野千鶴子さんをはじめとする4名の方にご登壇いただき、シンポジウムを行った。映画制作にあたり、島根あさひ社会復帰促進センターを訪れた際のエピソード等、時間が経つのを忘れるくらい興味深いお話ばかりであった。

映画『プリズン・サークル』は、全国各地で自主上映会が行われているので、ぜひ多くの方にご覧いただきたい。

（榎本）

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2023年1月19日発行　SSKW増刊通巻　5862号

巣立ちゼミ、はじめました

巣立ち会では職員に対して外部研修への参加呼びかけや、スキルアップ研修への参加など積極的に行われています。昨今はコロナの影響からオンライン開催が増え、コロナ前よりも参加しやすい状況となりました。自分たちでも探し、今までは難しかった遠方での開催にも参加が可能となり、選択肢はずいぶんと拡がりました。そうやって自分自身の学びを深める機会は多く得ることができるのですが、それを職員間で共有する機会はなかなかありませんでした。

転機は、東京大学が行っている『TICPOC（文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム）』に巣立ち会から今年度参加させていただけたことでした。毎月の講義はどれも刺激的な内容でいろいろなことを考えるきっかけとなりました。それを自分の中だけで終わらせるのは惜しい。私が所属する巣立ちホームで『TICPOC』を通して私が考えたことや感じたこと、もちろん学んだことを共有しようと思うようになりました。実施に向けて内容を考えている時に巣立ちホーム以外からも参加したいという話があり、一緒に内容を話し合っているうちに巣立ち会全体で実施することになりました。

巣立ち風にて

こうして職員同士の自主的な学びの場である「巣立ちゼミ」が６月に立ち上がり、毎月開催しています。私たちの支援の根底には何があるだろうという第1回のテーマに始まり、「LGBTQ+」、「障害者権利条約」、「トラウマインフォームド・ケア」とテーマを変えながら、根底にある大切なものを繰り返し考え続けている、そんなゼミです。毎回20人近い職員の参加があり、終了後も意見交換をしている光景は本当にうれしいことで、職員同士が考えを深められる「場」となりつつあります。今は職員２名で話し合いながら、テーマを「拡げる」、「深める」を繰り返すスタイルをとっています。いずれはほかの職員もコーディネートし、また巣立ち会以外の方も参加できる、そんな「場」になればと願っています。

（玖津見）

令和4年度東京都精神障害者地域移行促進事業

今年度も東京都より「精神障害者地域移行体制整備事業」を受託することとなり、その一環として、精神障害者地域移行関係職員に対する研修を開催した。本研修は、東京都から委託を受けている精神障害者地域移行促進事業委託事業者が担当圏域内の精神科病院や指定一般相談支援事業者、自治体等の職員を対象に行うものである。当法人は、北多摩南部（武蔵野市・三鷹市・府中市・調布市・小金井市・狛江市）と今年度より西多摩（あきる野市・青梅市・奥多摩町・羽村市・日の出町・檜原村・福生市・瑞穂町）を担当している。

今年度の本研修は①オンデマンドにて動画配信研修（11/1～9）と②集合研修（11/10.11/17）にて実施し、70名を超える方々が参加された。研修プログラムは、表１・表2の通り。

動画配信の講義内容については、初めての試みとなったが、受講生の好評を得られた。また、対面研修では、講義内容はもちろん、グループワークで、久々に顔を見てざっくばらんに他の市区町村や事業所の人達と意見交換ができたことに、受講生には有意義な時間を持てたと感じていただけたようだ。研修全体を通しても「参考になることがとても多かった。」「またこのような研修が合ったら積極的に参加したい。」という意見があった。

今回の研修も、広義に地域移行を捉えた内容であったため、改めて精神保健福祉法や精神科医療を考えることとなり、地域移行に取り組む受講生それぞれが日々の業務の振り返る機会になったようだ。この研修を機に参加者には、地域移行促進について、今自分ができることはなにかをじっくり考え、行動に移していってもらいたい。　（大竹）

【表1】令和4年11月1日（火）～9日（水）オンデマンド動画配信研修

テーマ		講師
導入	東京都の精神障害者地域移行に関する状況について	東京都　障害者施策推進部　精神保健医療課 精神保健福祉担当　石井　浩子氏
講義Ⅰ	地域生活支援センターリヒトが行った地域移行の経験 ―精神科病院・自治体・相談支援事業所との関係に注目して―	地域活動支援センター　リヒト 施設長　東　貴宏氏
講義Ⅱ	地域移行・地域定着の充実化に向けて ～ご本人らしい生活の実現に向けて地域ができること～	三鷹市 健康福祉部 障がい者支援課 基幹相談支援センター主査　植竹　佑樹氏
講義Ⅲ	調布市における地域移行の現状と課題	調布市 福祉健康部 障害福祉課 相談係長　田中　郁子氏
講義Ⅳ	日の出町自立支援協議会 精神障がい者地域移行促進部会の取り組み報告	日の出町自立支援協議会 精神障がい者地域移行促進部会 部会長　金森　通子氏
講義Ⅴ	地域医療を通して感じること、考えること	秋川病院 院長　植田　宏樹氏
講義Ⅵ	弁護士の活用法	あさひ法律事務所 弁護士　採澤　友香氏
体験発表	入院・退院・そして今	巣立ち会利用者

【表2】令和4年11月10日（木曜日）・17日（木曜日）　集合研修（場所：サザン）

テーマ		講師
講義Ⅰ	地域移行にまつわる施策について	厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 地域生活支援推進室 障害福祉専門官（精神障害福祉担当） 地域移行支援専門官（併任）　金川　洋輔　氏
講義Ⅱ	地域移行支援の隘路と精神医療国家賠償請求訴訟	日本社会事業大学大学院　福祉マネジメント研究科長 教授　古屋　龍太　氏

2002年4月23日第三種郵便認可（毎月3回5の日発行）
2023年1月19日発行　SSKW増刊通巻5862号

巣立ち会 賛助会からのお知らせ

【令和4年度分として　順不同】

林繁子様、田中愛様、姫本昭夫様、会田孝太郎様、千葉啓子様、小島明様、青木鉄次様、草間緑様、櫻井錠治様、三宅敬造様、佐藤弘章様、宮田雄吾様、田村博様、長門榮治様、松原のり子様、株式会社ウィズユー　与那覇五重様、村瀬信子様、渡部譲様、阿部康代様、塚本能子様、木下旭様、馬部裕之様、医療法人社団欣助会　吉祥寺病院様、山崎秀子様、山田千代様、櫻森輝文様、大坪節子様、伊東暁子様、飯野和典様、株式会社円グループ　寺田悦子様、野田廣様、井上廣子様、河田イセ様、高田美智子様、外山典枝様、山田昭徳様、高坂正男様、岡﨑秀昭様、横山恵美子様、かささぎ会　江頭由香様、熊井秀哲様、前田マサヒロ様、倉持和宏様、尾向陽子様、栗原美穂子様、星野和子様、楠原彰様、滝澤宏子様、角谷徳道様、村上建一様、三枝純様、白内美和子様、永田美香様、大谷さかゑ様、江戸川太郎様

〈令和4年6月23日から令和5年1月15日到着分〉

たくさんの方々から、会費や寄付をいただいております。ご支援ありがとうございます

巣立ち会の活動にご協力をお願いします。

賛　助　会　費

●年会費　　一口　　3,000円
●郵便振替　　口座番号　00140-4-542860
●加入者名　　巣立ち会 賛助会

巣立ち会 賛助会　会長　松岡恒夫

編集後記

隣の国では戦争が止む気配がありません。コロナ禍もありすっきりしない暗い時代の様相を呈しています。
ふと太宰治が戦時下の中で書いた「右大臣実朝」の一節「平家ハ、アカルイ。アカルサハ、ホロビノ姿デアロウカ。人モ家モ、暗イウチハマダ滅亡セヌ。」という言葉が頭の中をよぎりました。読者の皆様はこの現状をどう感じていますでしょうか？
今時代は確実に変化しています。それを受け入れながら進んでいくのが正しい道なのでしょうか？ただ、これまでもこれからも巣立ち会の歩みは確実に前に向かって進んでいくことでしょう。上映会、講演会等ご協力、ご参加いただいた方々ありがとうございました。
（山本）

発行所　〒157-0072　東京都世田谷区祖師谷3-1-17
ヴェルドゥーラ祖師谷102
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
定価　50 円
編集　社会福祉法人巣立ち会
〒181-0014　東京都三鷹市野崎2-6-42
電話　0422-34-2761
E-mail: sudachi-kaze@sudachikai.eco.to
http://sudachikai.eco.to/